

□ 次の文を読んであとの問いに答えなさい。

突拍子もないたとえ話でキョウシユクだが、旅は読書に似ていると僕は思う。共通点は次の通りだ。

—— いずれも、見聞を広めてくれる。

—— そして、娯楽でもある。

—— さらに、選択肢が幅広い。

これらのうち、最後の「選択肢」について、ここでは書いてみたい。

(1) 一言で読書とくくっても、かなり幅広い。小説、エッセイ、ノンフィクション、ビジネス書、自己啓発書、趣味実用書……など、ジャンルは多様だ。小説だけをとってみても、ミステリー、純文学、時代小説、ライトノベルなど細分化されている。ついでに言うと、読む媒体も単行本や文庫、新書など複数ある。最近は電子書籍という新しい手段が生まれ、どんな端末でどんなフォーマットで読むか、なんて問題まで出てきた。

少々強引ではあるが、これは旅にも当てはまるような気がするのだ。

どこへ行くのか。アジアなのかヨーロッパなのか。(a) 言えばアジアのどこなのか。どんな方法で行くのか。そこへ行って何をやるのか。旅は十人十色であり、選択肢は星の数ほどある。

旅を計画するにあたっては、まずは「どこへ行こうか」と考えるだろう。そして決定に至るまでには、目的や予算、タイミングなどさまざまなヨウインが影響を及ぼす。

(4) これも読書と似ている。何を読もうかと考える。書店でたまたま目に留まった本、本棚に「積ん読」状態になっていた本、友だちにススメられた本など、読むべき本が多数ある中で一冊を選ぶには、何らかの理由が存在する。

(2) 僕の指針はシンプルだ。それは、できる限り読みたい本を読むということ。当たり前に見えるが、これが案外難しい。読みかけの本が

あるから、仕事の資料だから、友だちが貸してくれたからといった種々のヨウイン<sup>⑤</sup>で、本来の欲求とは関係のない読書体験になってしまうことは大いにあり得る。

何かしらのしがらみがあったとしても、無視したほうがいい。無条件で読みたい本を読むべきだ。そのほうが、トータルでの満足度は高くなる。

旅もまったく同様で、基本的には最も行きたい場所へ行くのが最良ではないか、というのが僕の考えた。(b)、本章では行き先の選び方について掘り下げてみたい。

ちなみに最初に書いておくが、少なくとも、金額で選ぶのはあまり感心しない。

「本当はフランスに行きたかったけど、イギリスのほうが航空券が安かったからイギリスにした」といった選び方をする人がいる。かくいう僕自身も、予算の関係で行き先を変更した経験がないわけではない。(c)、それって所詮はダキョウ<sup>⑥</sup>なのだ。結果的にイギリスで満足できたとしても、フランスに行ったほうがもっと楽しめた可能性は否めない。

どこでもいいのなら話は別だが、よほどの金額差がない限りは、初志<sup>③</sup>を貫徹してフランスにしたほうがいい。読みたい本があっても、ハードカバーでは買わずに文庫になるのを待つ行為にも似ている。単行本と文庫の金額差なんて、旅の費用に比べれば微々たるものだが、いずれも無粋<sup>B</sup>であることには変わりない。読みたい本を読む。行きたい場所へ行く。これが理想だ。

行きたい場所が明確に決まっているのなら、無条件でそこに決定したい。けれどもそうでない場合は、複数の候補地から選ぶことになる。では、旅先を選別する基準となるのは何なのか――。

それは、目的である。シンプルに考えると、自ずと答えはハッキリしてくる。

(d)、「砂漠でラクダに乗りたい」という目的。これを達成できる旅先となると、ある程度絞られてくる。砂漠といえはやつぱりサハラでしょう、とモロッコを選んだり、もう少し近いところでドバイを選んだり。さらに近場にして予算を抑えたいなら、中国の敦煌<sup>④</sup>あたりも候補に浮上するだろうか。いずれにしろ、目的ありきだと旅先選びは違和感がない。

( e )、「どこへ行きたいか」に加え、「何をしたいか」が意味を持つことになるのだ。テーマ性とも言い換えられる。

テーマは何だっついていい。多種多様なものが考えられる。僕のこれまでの旅からいくつか紹介すると、「遺跡の写真を撮る」「お祭りに参加する」「コンサートを観る」「浴びるほどワインを飲む」「友だちに会いに行く」などなど。我ながらまるで統一性がなくて呆れるが、同じテーマを何度も追求したっついていい。

1回の旅であれもこれもとヨクバラないのがコツだ。週末海外をはじめとする短期旅行ではとくにそうで、僕の経験では、最低限達成したいテーマを一つだけ設定すると、うまくいくことが多い。複数のテーマを追いすぎると、むしろ個々の印象や満足感が薄れてしまいうのだ。

吉田友和「3日もあれば海外旅行」より

問一 線①～⑦の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 ( a ) ( e ) に入る語を次から選び、記号で答えなさい。

ア そのうえで      イ つまり      ウ さらに      エ たとえば      オ けれど

問三 ……線A「突拍子もない」B「無粋である」の意味を、それぞれの選択肢から選び、記号で答えなさい。

ア 途方もない。

イ 不都合である。あられもない。

ウ 言うに及ばない。もちろんである。

エ 有名である。世間に知れ渡っている。

オ とほうもない。度はずれなこと。

ア やばったいこと。

イ 感心できないこと。

ウ うるわしくはないこと。

エ くどくどしいこと。

オ なさげないこと。

問四 本文には次の一文が抜けている。この一文が入るところの直前の五字を抜き出しなさい。(句読点は含む)

行きたいところが一つだけとは限らないし、旅先が特定していない人のほうが実際には多いかもしれない。

問五 ———線(1)は「旅」の比喩であるが、この比喩で伝えようとしているものとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 旅はどこにでも行けるといふ自由があり、それを楽しむのも自由だということ。

イ 本が持ち合わせているほどのおもしろさと手軽さがあるということ。

ウ 書物に認められるほどの多くの分野や深みがあるということ。

エ 手に取りたいものや目的が違うように、行ってみたい所やその目的もさまざまであるということ。

オ 読書をするとき何かの本を手取るように、旅もさまざま選べるものが多いということ。

問六 ———線(2)の「難しさ」は、どこから生じるのか。その理由を次に掲げた。あてはまらないものが複数含まれている。選び記号で答えなさい。

ア 人からのすすめがある時。

イ 自分が買ったままにしている時。

ウ 仕事でせねばならないことである時。

エ 手に入れようとしているものがない時。

オ もう十分満たされていてその気分がない時。

問七 ———線(3)のように、筆者が述べる理由となるのはどういふ点か、読書についての説明部分から四十字未満で抜き出し、「」から」につづくよ

うに解答欄に記入しなさい。

問八 — 線(4)は、失敗しない方法のしめくりの言葉として書かれている。では、ここでの「違和感」に対立する旅の成功の秘訣ひけつを表す言葉を、文中から二十字程度で抜き出さない。

問九 — 線(5)のような状態をいさめることわざを記しなさい。(「二」「追」「兎」の文字を含むこと。)

㊦ 次の文を読んであとの問いに答えなさい。

国学者小山田与清（一八四七没）が著した『鯨肉調味方』という書物に、

（A）酒にてときたる味噌又は生醤油につけて鋤焼にすべし。鋤焼とは、古き鋤のよく摩すれて鮮明なるを熾火の上に置きわたり、それに切肉をのせて焼くをいふ。鋤にかぎらず鉄器のよくすれて鮮明なるを用ふべし。

とあり、『料理談合集』という本にも、

（B）雁・鴨・かもしかのるい、つくりたまりにつけおき、古く遣いたるからすきを火の上に置おき、袖のわを跡先におきて、鋤のうへ右の鳥るいをやく也。いろかはるほどにてしよくしてよし。

と説明している。

鯨や雁・鴨・羚羊の肉の臭いを消す喰べ方という点で、明治開化以後の日本人が、西洋文化にまねて、牛の肉を口にした頃の方法と共通するところがある。また、味噌やタマリ醤油に漬けた上で焙あるといふのは、朝鮮焼肉と同じであるし、鋤の刃の透き間のあるところも、朝鮮焼肉の器具と共通しているから、案外、徳川時代に朝鮮から習い伝えた調理法であったかも知れない。

よく使い古して、スベスベになった鋤を使うのは、鉄気を嫌ってのことであろうし、要するに、現代風に言えば、バーベキュー・朝鮮焼肉といったところであろう。

従って、関西風のスキヤキでは、浅いスキ鍋なべに火が通ると、薄切りの牛肉をじかに焼いて、醤油をつけて、まず牛肉そのものの味を楽しみ、それから肉を入れ野菜を加えて、砂糖・醤油で味をつけるところに、本来の鋤焼の気分が残されているが、やや深い鍋に、初めからワリシタを煮立たせて味付けをすませ、そこへ肉や野菜を入れて煮込む、東京風の牛鍋は、スキヤキとは似而非なるものである。

萩谷朴『語源の快樂』より

注 朝鮮焼肉：プルコギのこと。

問一 調理法が記された(A)(B)から、説明の「タマリ醤油」「よく使い古して、スベスベになった鋤」に該当するところを抜き出しなさい。

問二 「いろかはるほどにてしよくしてよし」を漢字かなまじりの文に改めなさい。(漢字五つを使うこと)  
ただし、歴史的かなづかいのままにしておくこと。

問三 この調理法は、当時の日本人の味覚に触れている。当時の人が好まなかったこと二点をあげなさい。

問四 この文に説明されたものを一語で書き表しなさい。

問五 ここでいう「似而非なる」とは、どういう意味なのか。次から選び、記号で答えなさい。

- ア 似ているということ
- イ 違っているということ
- ウ まちがっているということ
- エ 改良されたものであること

問六 同じような料理でも関西と関東とどの点に特徴があると言っているのか。次の( )に言葉を入れなさい。

現在は同じ料理名だが、関西では肉を( 1 )、関東では( 2 )む点に調理の特徴がある。

Ⅲ 次のそれぞれの四字熟語の空欄に入る言葉を答えなさい。

- A 五里（ ）中  
B 順（ ）満帆  
C 東奔（ ）走  
D 自暴（ ）棄  
E 我（ ）引水  
F 温（ ）知新

Ⅳ 次の——線①から⑥の品詞をあとから選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度使っても良い)

宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好さそうな所へ気楽に胡坐をかいて見たが、やがて手に持っている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和と名のつくほどの上天気なので、往來を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。

(夏目漱石『門』冒頭部)

- ア 動詞      イ 名詞      ウ 形容詞      エ 形容動詞      オ 連体詞      カ 副詞      キ 助詞      ク 助動詞

